

# 中世都市の構造と景観 the Structure and Landscape in the Medieval City

鋤柄俊夫

Toshio SUKIGARA

同志社大学歴史資料館

〒 610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3

Doshisha University Historical Museum

1-3 Miyakodani, Tataru, Kyotanabe City, Kyoto 610-0394, Japan

## あらまし:

これまで、中世史研究の主要な課題は、荘園制に代表される農民と武士の対立の歴史であった。しかしこれに対して、中世の日本列島で重要な役割を果たしていたのは農民だけではなく、工人・商人・漁民・芸能民そして宗教者たちでもあったことが、明らかにされつつある。そして中世の都市とはまさにこういった人々が集住していた場所であり、それらは京都や鎌倉以外にも、多く存在していたことが明らかにされてきている。中世都市の研究は、中世史を見直す大きな原動力となっている。

これを前提として本研究が対象とした地域は、京都府八幡市に所在する木津川河床遺跡と京都府京田辺市に所在する普賢寺谷の中世館群である。木津川河床遺跡は平安時代後期から中世前半にかけて繁栄した石清水八幡宮の境内都市であり、普賢寺谷の中世館群は室町時代におきた山城国一揆の拠点と推定されている中のひとつである。本研究では、考古学調査によって普賢寺谷中世館群の景観復原をおこない、モデルを作成しシミュレーションをおこないたい。また考古学・地理学・文献学調査によって木津川河床遺跡とその周辺の遺跡を総合化し、GISの方法によって石清水八幡宮の境内都市の構造を明らかにしたい。

## summary:

So far, as for the main problem of the medieval history research, the farmer and the warrior were opposing. However, in Japan in the Middle Ages, the artisan, the merchant, the fisherman, the entertainment people and the religion persons, too, were an important character. Then, the city in the Middle Ages is the place which was living in them. Then, a lot of cities in the Middle Ages existed at the people except Kyoto and Kamakura, too. The research in the Middle Age city is the big motive power to reconsider a medieval history.

This research dealt with the Kitsugawa riverbed ruins in Kyoto Prefecture Yawata City and the Fugenji valley ruins at Kyoto Prefecture Kyotanabe City, presupposing this. The Kitsugawa riverbed ruins are a city in the Iwashimizu-hachiman-gu shrine who is prosperous in the Kamakura times from the Heian Period. Fugenji valley ruins ( the residence group ) are estimated to be the base of " Yamashiro Kuni Ikki " ( the Muromachi times ).

In this research, a view is restored in the Fugenji valley ruins by the archaeology investigation, it creates a model and it wants to do a simulation. Also, it analyzes Kitsugawa riverbed ruins by the investigation of the archaeology, the geography and the philology, being general and it wants to clarify the structure of the city in the Iwashimizu-hachiman-gu shrine by the way of GIS.

## キーワード:

中世都市、考古学、遺跡情報、数量化、写真測量、景観復原、GIS、石清水八幡宮、普賢寺谷

## keyword:

A medieval city, archaeology, remains information, quantification, photograph measurement, landscape restoration, GIS, Iwashimizu-hachiman-gu shrine, hugenjidani valley.

## 1 はじめに —都市研究の意義—

中世史を見直すにあたり、今、最も注目されているのが都市研究である。これまで、中世史研究の中心的な課題とされてきたのは、荘園制に代表される農民と武士の対立の歴史であった。しかしこれに対して、中世の日本列島で重要な役割を果たしていたのは農民だけではなく、様々な職種に携わった工人、大量で多岐にわたる品々を運び、それで利益を得ていた流通業者と商人、日本列島を取り囲む海で生活していた人々、芸能民そして宗教者たちでもあったことが、網野善彦氏をはじめとする研究者たちによって明らかにされつつある。

一方中世都市とはまさにこういった人々が集住していた場所であり、それらは京都や鎌倉以外にも、日本列島のいたるところにあったと考えられ、それゆえ中世都市の実態がわかれば、中世史研究はこれまでと違った部分で飛躍的に進むと言われているのである。実際この研究は、政治と文化の中心であった京都や鎌倉などの代表的な中世都市で、多く残されている史料によって様々な視点からの成果が発表され、中世史を見直す原動力のひとつとなっている。

しかし、これら以外の日本列島の各地にあった、農村とは異なった多くの町や村や都市的な場については、その研究こそが京都や鎌倉などの中心的な都市以上に必要であるにもかかわらず、文献史料でこれ以上の研究を進めるのが困難なことに相俟って、網野善彦氏の中世都市論に疑問が投げかけられるなど、混乱と停滞が各所で生まれてきている。

そこで本研究の目的であるが、このような中世都市研究の現状をふまえ、限られた史料から知られている各地の都市的な場を、文献史料の乏しい地域においても有効な研究成果を築き始めている中世考古学の方法によって調査・分析し、あらためてそれらが網野善彦氏の描く中世都市論とどのように一致し、また異なるのかを明らかにし、それによって従来の中世史研究にもまた中世都市論にも新たな展開を促すところにある。

そのために、本研究では対象とする地域を京都府八幡市に所在する木津川河床遺跡と京都府京田辺市に所在する普賢寺谷の中世館群に決め、それぞれにおいて中世都市にかかわる問題を考えてみたい。

前者は平安時代後期から中世前半にかけて大いに繁栄した石清水八幡宮の境内都市であり、後者は中世後半の山城国一揆の拠点と推定されている中のひとつで、地形は福井県の朝倉氏一乗谷遺跡と瓜二つでもある。ただし文献が少なく、いずれも実態は不

明である。本研究では測量・分布・発掘調査などから、これら2遺跡の景観復原をおこない、京都や鎌倉などの特殊な都市ではなく、中世において各地で見られた一般的な都市とはどのようなものであり、それは遺物と遺跡からどのようにモデル化され、そして文献史研究の成果とはどのように関わり合うのか、それらを説明したい。

さらに本研究では、対象とする村・町・都市などの遺跡を個別に扱うのではなく、それらが地域において各々必要な役割を担いながら相対的な社会力学の関係において均衡的に配置されていたことを重視し、その複雑な因果関係をGISの方法により多変量解析的に分析することを試みたい。一般的な村や町に対する都市の特質は、この方法によって明らかになるはずである。

なお本研究のモデルとなった研究事例は、Anthony M. Snodgrass & John I. Bintliff によるBoeotiaでのフィールド調査とその報告を代表とする。

## 2 研究の履歴

先に述べたように、本研究にとって重要なポイントは、ひとつには、遺跡情報の数量化とそれに地理的な要素を加えた多変量解析であり、またひとつにはそれをシミュレーションして検討するための臨場感溢れるプレゼンテーションである。

その点で本研究には、これに先行するものとして、次に述べる遺跡情報の数量化による中世村落の復原研究をもっている。本研究の基本的な考え方は、この研究にはじまる。

鋤柄俊夫1993「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』48集

その研究の対象地域は大阪府南河内郡美原町から堺市におよぶ一帯で、記録によれば、この地域は平安時代末期から鎌倉時代にかけて河内鑄物師と呼ばれる、金属加工技術者の本拠地であった。

この研究では、このような地域の状況を前提にして、最初に地理・文献・考古の整理によって古代から中世にかけての村落の大略の変遷を復原し、それに加える形で、遺跡単位ではなく、一定の面積で区切った調査地点毎の遺跡情報を数量化し、その変遷から見えない中世村落の実態に近づこうとした。

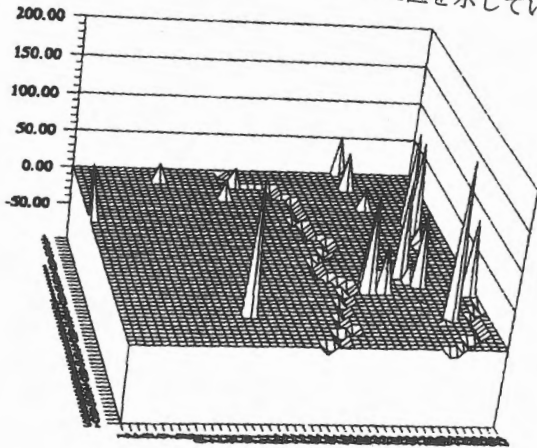
そもそも従来よりおこなわれてきた遺跡分析は、本来複数の性格・歴史的事象を含んでいる遺跡群に対して、それらを質的にも量的にも共通にあつかってきたことと、それらの遺跡を評価するデータが調



古墳時代  
 査面積と地点により異なっていたことで曖昧さを除去できないでいた(左図:古墳時代の遺跡分布)。

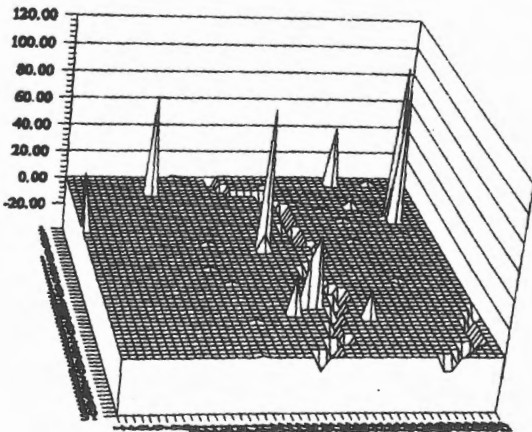
そこでこの研究では、条里地割を遺す当該地域の特徴を反映すべく、遺跡単位ではなく1町(約109メートル)四方を単位とした調査地点単位でデータを集積し、さらに検出された遺構に係数を付与することによって、その調査地点に質的強弱をつけることとした。

第1期(7~10世紀)西除川左岸北半部を除き、遺跡が点的に配置される状況を示す。時期により同一地点でもポイントの増減のみられる場合もあるが、全体としては類似した遺跡の配置を示している。



8世紀

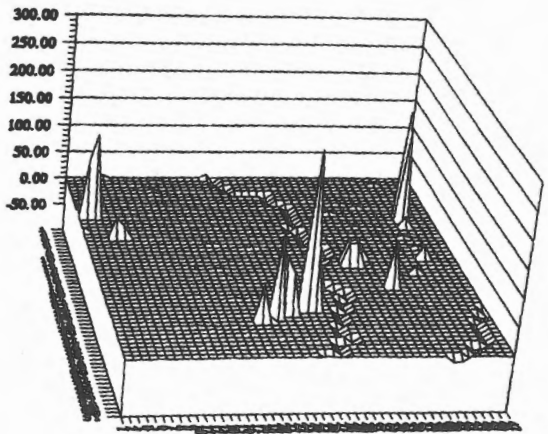
8世紀の調査地点数量分布



12世紀

12世紀の調査地点数量分布

第2期(11・12世紀)西除川左岸の全域で点的分布がみられ、一方で右岸南半部では遺跡が失われる。新しい集落の出現と既存の集落の断絶による変革期である。ただし遺跡のポイントは第1期同様にあまり高くなく、それらが孤立的で散在的である点も前代と同様な傾向と言える。



14世紀

14世紀の調査地点数量分布

第3期(13~15世紀)全域で遺跡の分布が確認される。前代にみられなかった西除川右岸南半部においても遺跡の分布が復活する。ただし第1期の集落が原則として条里地割と対応する関係であったのに対して、この時期の集落はその規格に準じたものと、その規格と関係の少ない景観を示すものがある。遺跡のポイントは全般に高く、面的で連続的である。

第4期(16世紀)おそらくこの時期の後半代からは、近世村落と重複するものと考えられ、考古学的には得られる情報が少なくなっている。

この方法により、これまで実態とは別の次元であった抽象的な遺跡の分析が、調査地点データの集合として、より実態に近い遺跡情報の分析に転換できる可能性が示された。

### 3 当該研究における問題

—遺跡情報の数量化にかかる共通認識について—

遺構と遺物から構成される遺跡情報の数量化には様々な考え方があがるが、ここでは遺構に限定し、遺構は見つからないが遺物が見つかるような場合(包含層)を最小の1ポイント、遺構では最も普遍的に検出されるピット(柱穴)をその倍数として、あくまで相対的で実験的な数量化をおこなった。

建物(24ポイント)は3×4間と2×3間の柱穴数の平均にピットの2ポイントを乗じた。

井戸(2~12ポイント)と溝(2~24ポイント)



も、広義においては相対的な社会学で説明される一つの因子にすぎないものと言える。これはこれまで考古学がおこなってきた集落個々の普遍的な類型化作業とその変遷過程の整理だけでは、表現することのできない問題であり、その説明こそが、たとえば支配構造や流通経済、そして中世社会を律した制度的な部分を、より具体的で新しい形にして発言していけるものであると考える。

したがって、そのような地域における社会的な役割のバランスから結果的にうみだされた最適配置または均衡配置は、それを起点とし、いくつかの条件を整理する中でシミュレートして遡及することにより、そのような配置がいったいどのような条件によってとられたのであるかを、説明できるものになると考えられる。たとえば郵便ポストの最適配置は、人口密度を単位あたりの収穫高に、ポストを集落に置き換えることによって、適切な収穫高を得るための集落の最適な配置を計算することができるであろうし、移動図書館を水路と灌漑に置き換え、読者を耕作地に置き換えれば、結果的に現出している最適な水路網に対して、それを生み出した耕作地の位置が復原できるのではないとも考えられ、立地競争は、まさに村落が耕地と生産の拡大を求めて最も有利な場所を求めて移動を繰り返した結果を分析する作業なのである。

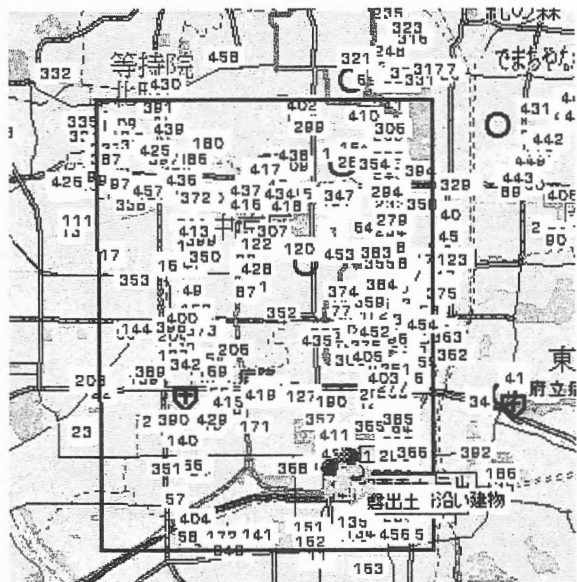


古代郷と近代集落のポロノイ図(部分)

ここではその一例として、明治の仮製地図にみえる村落配置のポロノイ図と古代郷の配置のポロノイ図を作成してみた。明治の仮製地図の場合は、それぞれの村落の村高と人口と範囲を加える必要があるが、仮に農耕を基準とするならば、一定の収穫高を得たそれぞれの村落は、均衡した配置を見せること

になるはずである。しかし現実の村落配置はそれと異なり、それが農業生産以外でこれらの村落の位置を規定した条件を示しているものと考えられる。それが何であるか。再生産基盤を含めたあらゆる異なった社会環境がそれぞれどのような最適配置を生み出したのか、検討はまだ始まったばかりである。今後条件が整えば、これらの図に水路・道・耕地・城・寺社・条里の施行単位・文献史料・民俗資料など様々な要素をとりこみ、試行錯誤を進めてみたいと考えている。

## 5 中世都市京都調査地点情報データベース 鋤柄俊夫2002「都鄙のあいなか」『国立歴史民俗博物館研究報告』92集



京都市内調査地点マップ

これまで京都市内の考古学的な研究は、その膨大な遺物量に圧倒され、やむをえず特徴的な資料に代表させるか、逆に統計的な処理によって全体的な傾向を示すことにとどまり、なかでも遺構については、総括的な分析を行うことができずにきた。近年、堀など一部の遺構については積極的な集成により成果をあげつつあるが、やはり明確化された問題意識を前提として、位置情報に基づいた調査地点毎のデータベースを整備し、それを活用した総合的な検討が必要な段階に来ていることは言うまでもない。

本事例は、公開されている遺跡の調査情報を元にあらためてその内容を検討し、それぞれの遺跡情報をデジタルマップ上に配置したものである。

変遷をみると、9世紀のドットは平安京の全域におよび、それぞれの調査地点から当該期の遺物または遺構が検出されている。また右京の7カ所で流路

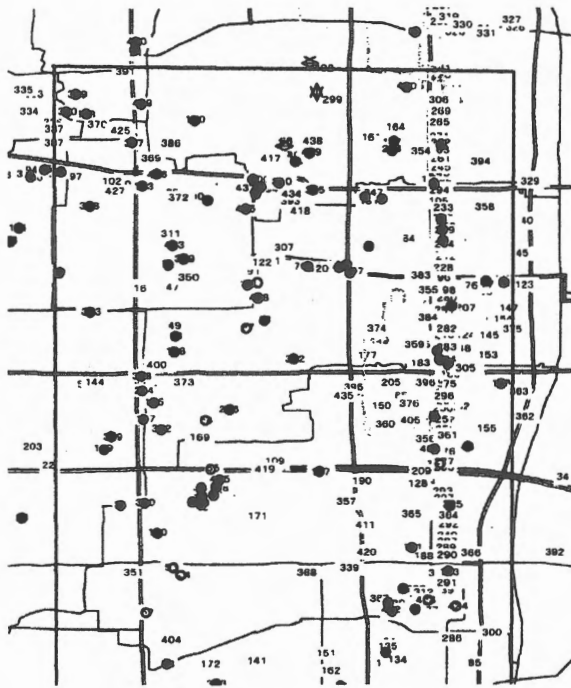


図26-1 9世紀

が確認されており、それらはわずかに北北東から南南西へ向いた軸によって一連のものである可能性が指摘できる。

10・11世紀は、右京でも調査地点データの分布を残してはいるが、9世紀と異なり墓と耕作地が確認されている。明らかに右京から調査地点データが撤退するのは12世紀代でドットの一部は嵯峨野へ続く

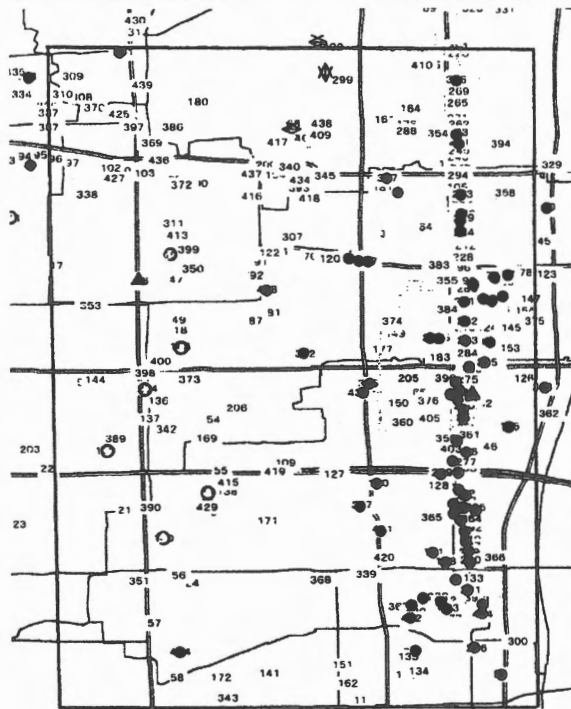


図26-4 13世紀前半

右京の北西部に残るものの、それ以外の右京の地域には耕作地がひろがり、一方で左京を東へ越えた地域にもドットのまとまりが認められる。

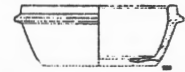
13世紀以降、右京からのドットの撤退は決定的で、逆に分布は鴨東へも広がる。また左京内の分布は南部への偏りがわずかにみえる。13世紀後半の分布は基本的に前代と同様であるが、三条以南と鴨東地区で墓が散在する。また一条以北が前代より増加している。

14世紀は一条以北でドットの集中が明瞭に認められ、逆に一条～三条ではドットが減少して墓がみられる。三条以南ではおおむね六条までと八条周辺のまとまりが見られ、墓は七条および四条でみられる。

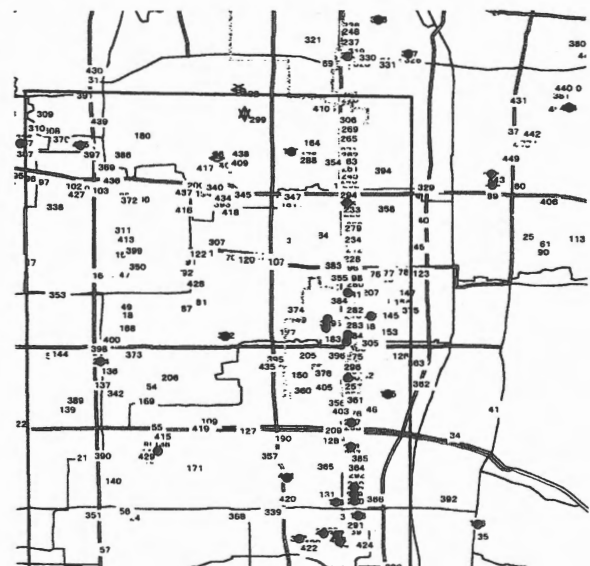
15世紀は分布の南限が六条にあり、また三条から四条と一条周辺にドットの集中がある。16世紀は七条から一条以北まで分布がつながり、特殊な遺構として、三条を中心とした地区で堀が多くみられる。

周知のように遺跡を構成する要素は遺構・遺物およびその出土状況であるため、調査地点の本来的な評価は、遺物の出土状況を考慮した上での遺構の説明によっておこなわなければならない。

そのため、検討が可能と思われる情報について、それぞれのデータを関連付け、蓄積をすすめているが、その一例を、一般に石鍋と呼ばれている滑石製の煮炊具に注目してみたい。



石鍋は長崎県の西彼杵郡をその主要な産地として鎌倉時代を中心に流通する煮炊具である。出土分布をみると、13世紀後半から14世紀代において洛中の南部に比較的多く分布する状況がみてとれる。しかし全体の分布をみると、とくに14世紀代は三条以北



石鍋の出土分布

のデータが散漫であり、一方で一条以北と鴨東地区は、調査地点数がそれほど多くないにもかかわらず石鍋が出土しているため、結果として必ずしも分布が三条以南に集中する訳ではない可能性もある。

しかしその一方で、六条以南の分布に注目すれば、その多くは墓からの出土であることがわかる。ただし墓と思われる遺構に土釜が伴う例もあり、また東日本で墓に土鍋や鉄鍋を埋める事例も知られていることから、これは石鍋というよりも、鍋・釜あるいは鉢一般のもっていた呪術性に関わる問題が大きいと考えられる。しかしそうであったとしても、土釜も土鍋も普及している洛中において、とくにここでは石鍋が目立つものであり、その点においてやはり下京は、上京より石鍋を用いる機会が多かったと言えるかもしれない。

遺物と調査地点とその時代情報を組み合わせることによって、大都市京都の地域的な特質にもアプローチすることが可能となる。

## 6 石清水八幡宮門前の風景

石清水八幡宮は、水陸交通の要衝である京都府八幡市の男山丘陵北端の峰に鎮座する。『護国寺略記』によれば、その創建は大安寺の僧であった行教が貞観元年（859）に大分の宇佐宮へ参拝した際、八幡大菩薩からの託宣を受けたことによるとされ、鎮護国家の神として天慶2年（939）には伊勢に次ぐ第2の格を与えられる。長和3年（1014）には宇佐八

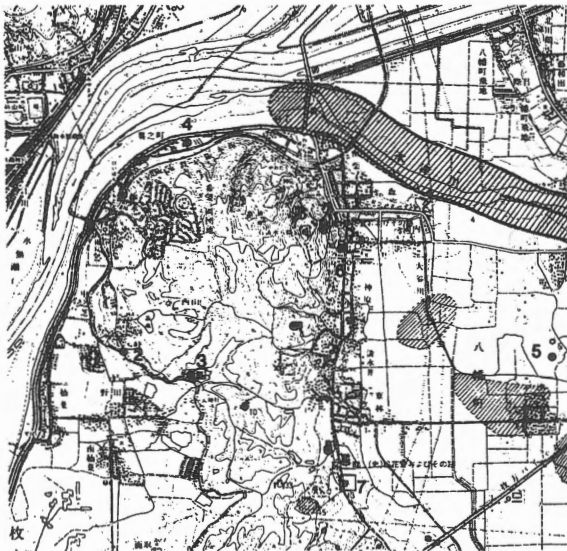


図5 男山丘陵周辺の遺跡 (1:50,000)

1. 史跡松花堂 2. 平野山瓦窯跡 3. 西山廃寺跡
4. 奥野町遺跡 5. 今里遺跡 6. 山本町遺跡
7. 志水廃寺跡 8. 石清水八幡宮

### 八幡市遺跡分布図

幡宮寺の弥勒寺講師元命が石清水の別当に就き、その権勢を九州までのばす一方、源頼信により源氏の氏神ともされ、康平6年（1063）には東国の相模国由比郷に勧請される。さらに白河天皇は仏教に熱心で毎年三月には石清水へ行幸をおこない、天承元年（1131）に権大僧都に補された検校光清とその孫の慶清の時代には、九州の弥勒寺・竈門神社・大隅正八幡宮も管掌下におき全盛期を迎える。鎌倉時代以降も時の権力者と密接な関係を維持するが、この時期以降は、山崎の離宮八幡に拠点をおいた大山崎の油神人に代表される神人の活躍もこの宮寺を語る上での大きな特徴となっている。

### 八幡市の遺跡

1～11は石清水境内の史跡松花堂地点出土の資料である。近世の松花堂にかかわる露地遺構や井戸などが発見されたが、中世以前の遺物は1～9は土師器皿、10は瓦器碗、11は中国製の青磁蓮弁文碗で、1・4・10・11が13世紀代あるいは14世紀前半、6・8が15世紀後半から16世紀はじめに比定される。

23～26は平野山瓦窯跡出土資料である。7世紀代を中心とした瓦窯であるが、4号窯内から9世紀後半から10世紀はじめの土師器類が出土している。

12～22は西山廃寺跡出土資料である。中世の包含層から13世紀代を中心とする瓦器碗・土師器皿および土釜・鍋類が出土している。なお22は大和で15世紀代に出土する資料に類似している。

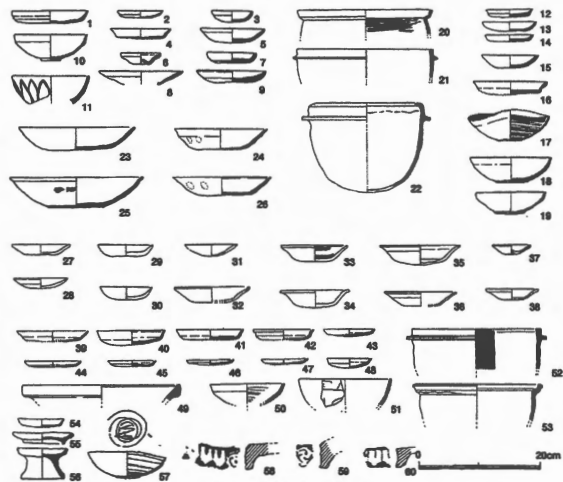


図6 八幡市内遺跡の出土遺物

27～38は奥ノ町遺跡出土資料である。淀川に面した男山丘陵の北側に位置し、「行基年譜」・「天平13記」にみえ、延暦13年（784）の記事で知られる山崎橋の推定地にも近く、この遺跡周辺が中世においても交通の要衝であったことがうかがわれる。

出土した遺物は、14～16世紀代を中心としており、多量の備前窯播鉢と土師器皿がみられる。土師器皿は16世紀前半代の資料も多いが、15世紀代の特徴を

もつ資料もみられる。

39～53と58～60は今里遺跡出土資料である。木津川氾濫原に形成された微高地上に立地する集落遺跡であろう。溝状のSX02などから13・14世紀代を中心とした遺物が出土している。瓦が出土している点から、溝で囲まれた寺院の可能性も考えられる。

57は志水廃寺出土の瓦器碗である。昭和10年代の採集で時期は13世紀代に比定される。

54～56は石清水八幡宮出土の資料である。昭和9年の室戸大風水害の直後に、八幡宮の本殿付近から土師器・瓦および陶磁器類が採集された中の一部である。55は糸切り成形で、56は瓦質に近い焼成と言う。時期の比定はできない。

なおこれらの遺跡情報以外に、男山丘陵の北東を流れる木津川河床からも、遺構と遺物がみつかり、おぼろげながらも中世において繁栄を遂げた石清水八幡宮門前の姿をうかがうことができる。

現在、条里地割りと街道および旧地形の復原をおこなった上で、調査地点の数量化をもとにした遺跡情報の地理データベース分析をおこなう準備をすすめている。

## 7 京田辺市普賢寺谷遺跡群の景観復原



普賢寺教法寺四至内之図

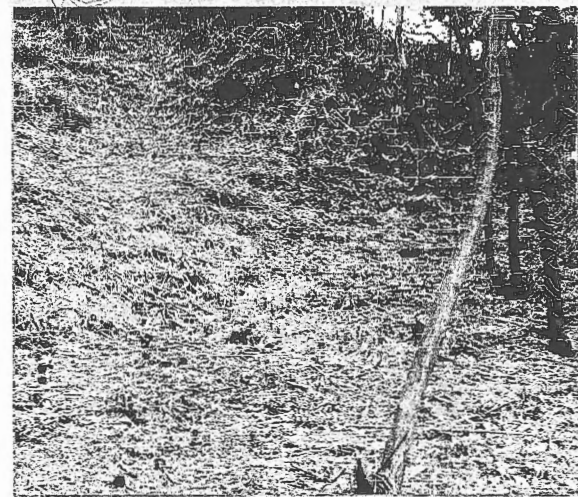
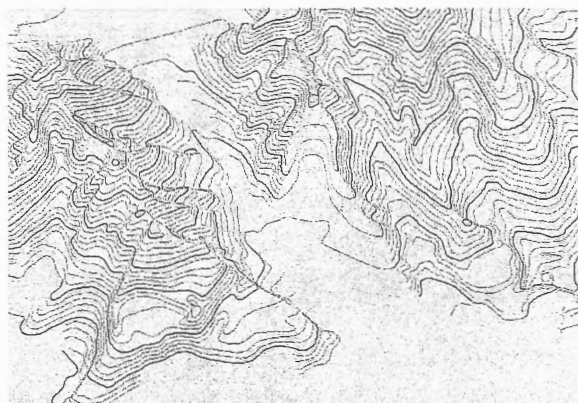
同志社大学京田辺キャンパスの所在する普賢寺谷北斜面は、古代・中世の大動脈であった木津川に流れ込む南山城最大の支流、普賢寺川によって形成された東西に長い谷である。正長元年の年号持つ絵図によれば、天平期の十一面観音をもつ普賢寺大御堂を



普賢寺谷北斜面の地形測量図(部分)

中心に、多くの館が建ち並んでいたことが記されており、現地でも館の郭と推定される平坦面が確認されている。

これまでこのような京都以外の地域における都市的な景観は、福井県福井市に所在する一乗谷朝倉氏遺跡によって代表されていたが、普賢寺谷遺跡群の場合は、一条谷朝倉氏遺跡が戦国大名である朝倉氏を中心としたいわゆる戦国城下町だったのに対して、山城国一揆に関係した国人達の館の集合体で、しかもそれらが普賢寺という宗教施設をその中核においていた可能性がある点で、これまでの見方ではとらえきれない社会構造をもっていた可能性がある。本研究では、このような都市的な場の復原研究を個人研究のレベルで容易におこなうための方法として、既存の地形測量データを基礎にした、新宗谷遺跡のデジタルカメラを利用した写真測量データとの連結によるシミュレーションの試みをおこなっている。



新宗谷遺跡の地形測量図

なお本研究は、2001・2002年度科学研究。基盤研究(C)「中世都市の考古学的研究—石清水八幡宮門前と普賢寺谷中世居館群のGIS分析—」による成果の一部である。